2019_7_18_改 4
2013_11_14 付

ホツマツタヱ講座

ヲシテの難語集（簡易版）

吉田説

𓇋𓂧𓄿𓂋（ヲシテ）の難語について、吉田説を解説しております。解説の特徴としては、ホツマツタヱの中に答えを求めて、徹底的にホツマツタヱを研究しました。そのため、現在の文献を引用した解説とは大きく違っているようです。詳しく、次の解説を読んで下さい。

スス暦の暦日解読（計算）式

スス暦を現在の暦と対比するため、太陽暦を応用した計算式（吉田説）

スス暦の暦日

キアヱ暦、または、スス暦（吉田説）と称する古代暦である。近代の太陽暦と比較するとホツマ神話の暦と云われるように誇張された年数に見える。

１、スス暦の特徴

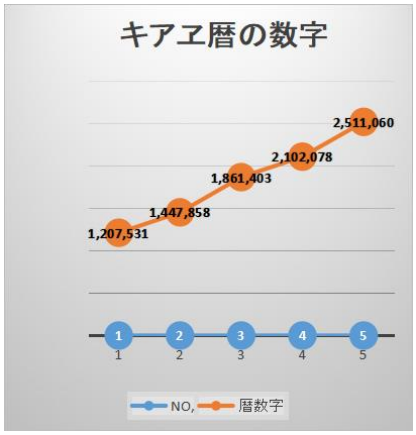
（１）歴代神の年数

スス暦当時の神は、アマカミ（天神）、アマキミ（天君）と呼ばれていた。その歴代神の年数穂（鈴枝穂）をホツマより抽出し、神と経過穂の関係をグラフ化した。

その結果、スス暦はグラフに示すように神の人数が増加する毎にスス暦の経過年数（鈴枝穂）も増加する暦であった。

（注1）　鈴枝穂より経過穂の計算方法は、ホツマ 28 アヤ参照。

スス暦（キアヱ暦）のグラフ化



ホツマ文	ヲシテの記事	NO,	経過穂 （注 1）	上下穂の差
四文、二四	ワカヒト の生まれ 二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)初日	1	1207531	
十九 B 文、一	オシヒトに 天日嗣する 二十五鈴　百三十枝の　年サナト(58)　春の初日	2	1447858	240327
二十五文、一	ワケイカヅチ　瑞穂の宮を造る 三十二鈴　フソミ（二十三)穂ツウヱ(23)　ウ月初	3	1861403	413545
二十六文、一	ウツギネに 天日嗣する 三十六鈴　三十四枝ミソヤ(三十八)　弥生望	4	2102078	240675
二十七文、二二	ウツギネ、ケヰの神となる(カモヒトの天日嗣) 四十二鈴　八百五十枝　極年ネウト(60)　ハ月四日	5	2511060	408982

（２）年齢の計算

スス暦は、鈴枝穂と月日が基準となっている。基準の最小単位は穂であり「穂は年」と記述していた。そこで、長子のヲシヒトが天日嗣された時のアマテル神の年齢を計算すると、次の（１）（２）項より 24 万 327 穂（年）に計算され、太陽暦と比較すると誇張された歳になっていた。

（１）　アマテル神が生まれた時の鈴枝穂は、（１）21 鈴 125 枝 31 穂になる。

（２）　アマテル神の長男のヲシヒトが天日嗣したのが、（２）25 鈴 130 枝 58 穂にある。

（３）　この間の穂を計算すると（１）1207531 穂と（２）1447858 穂の差 240327 穂になる。

２、スス暦と太陽暦の比較論

重複になるが、スス暦の穂(年)は太陽暦の年に比べると、前述のごとく過大な穂(年)になっていた。そこで二つの関係を方程式にするため、左辺にスス暦、右辺に太陽暦を置いた場合、左辺と右辺の時制の一致をさせる必要があった。そこで、右辺の太陽暦に合わせるためには、左辺のスス暦の過大な穂（年）を補正する必要があった。

補正式を下記に示すと、

（式　）スス 暦 の 穂（年）×（１÷過大な穂（年）の補正値）＝太陽暦の年

が考えられた。だが、この時点の（式）では、過大な穂（年）の補正値は不明である。そこで、（１÷過大な穂（年）の補正値）を施すであろう「ホツマのスス暦の鈴枝穂と月日の関係」を見るため、ホツマより暦の記述を次のように抜粋した。

（１）スス暦の鈴枝穂と月日の関係

ホツマより適宜に 10 件を抜粋すると、鈴枝穂の記述の後に月日が記述され、二つの関係は特別であることを示していた。

４－　２４　　二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)　初日ほのぼの（グラフの NO,１）
６－　　１　　二十一鈴　百二十六枝　年サナト(58)　弥生朔日日の大和新宮造り
１９Ｂ－　１　　二十五鈴　百三十枝の　年サナト(58)　春の初日に（グラフの NO,２）
２０－　　１　　二十六鈴　十六枝 ヨソヒ(四十一)穂　年キヤヱ(41)　弥生
２１－　　１　　二十六鈴　十七枝 フソミ(二十三)穂　弥生初日
２４－　　６　　時二十九鈴　五百の一枝　ミソヤ(三十八)　如月　朔日
２５－　　１　　三十二鈴　フソミ（二十三)穂ツウヱ(23)　ウ月初（グラフの NO,３）
２６－　　１　　三十六鈴　三十四枝ミソヤ(三十八)　弥生望（グラフの NO,４）
２７－　２２　　時四十二鈴　八百五十枝　極年ネウト(60)　ハ月四日（グラフの NO,５）
２７－　４１　　四十九の鈴の　九百十一枝　ハツ（初)穂キアヱ(1)の　初三日

（２）鈴枝穂の暦法は不明、月日の暦法は近代暦並みの暦法

鈴枝穂を太陽暦に換算する暦法は、ホツマから不明である。だが、前述の 10 件を見と、鈴枝穂が増加すると月日も変化していることがわかる。また、鈴枝穂より穂（年）の経過穂の計算も可能（注 1）であった。更に、10 件の月日の基になる年の日数、月数、月の日数がホツマには記述されており、この月、日、日数は近代暦の太陰太陽暦、太陽暦並みの日数であることが、ホツマの 1 アヤ（綾）に記述していた。このことから、スス暦の年月日は太陰太陽暦、太陽暦並み暦法が存在していることわかる。

（３）鈴枝穂の暦法の構築

前述より、鈴枝穂には暦法がないことが判明したため、暦法が判明していた月日と併せて、二つの暦に共通な暦法を構築する。まず、左辺に「鈴枝穂の経過穂の増加」、右辺に「年月日の経過日の変化」を置く。その時の方程式は、次の式が考えられる。

（式）鈴枝穂の経過穂の増加＝年月日の経過日数（注 2）より月日を求む

（注 2）経過日数の求め方は、一般的な算術で計算可能なため省略する。

（４）左辺、鈴枝穂の経過穂の増加の計算値

鈴枝穂の経過穂を計算する基は、春の季節、初の月日が判明していること必要である。そこで、先の 10 件より捜すと、初日より「春」「1 月 1 日」が確認でき、アマテル神が生まれた日の「４－　２４　二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)　初日ほのぼの」が最適である。そして、この行を起点に、10 件中の 2 件～10 件までの経過穂の増加分を各々に計算した。更に、事前にホツマに記述の月日欄も横に設け、後に計算の月日値が判明した時に照合がし易いよう準備した。詳細な経過穂の 10 件の計算は、次の表を参照。

（５）10 件の経過穂の計算

アヤ（綾）	ホツマ記述 鈴枝穂の穂	計算値 経過穂（注 1）	計算値 月	ホツマ記述 月日
４－　２４	1207531	起点　0		初日
６－　　１	1207618	87		弥生朔日
１９Ｂ－　１	1447858	240327		春の初日に
２０－　　１	1501001	293470		弥生
２１－　　１	1501043	293512		弥生初日
２４－　　６	1710098	502567		如月　朔日
２５－　　１	1860023	652492		ウ月初
２６－　　１	2102078	894547		弥生望
２７－　２２	2511060	1303529		ハ月四日
２７－　４１	2934661	1727130		初三日

（６）右辺、年月日の経過日数より月日を求む（計算）

そこで経過日数を計算するに当たり、一年の日数を確認すると、スス暦、太陽暦とも３６５日で同数である。だが、月数、月の日数はスス暦が太陰太陽暦のため、太陽暦と相違する。但し、１９年間の一年間の平均日数はほぼ同数になるため、月数１２ヶ月、月日数は約３０．４１６７日を用いて計算した。そして、「スス暦の鈴枝穂と月日の関係」を式で構築できるようになった。

だが、これはあくまで、スス暦の鈴枝穂と月日の関係である。このことは前述したアマテル神の年齢の 24 万 327 穂（年）の範囲であって、太陽暦として論じられてないのである。次の項では、そのスス暦を太陽暦で論じて見たい。

（７）スス暦を太陽暦へ換算

先の「スス暦をと太陽暦の比較論」の項で、「左辺にスス暦、右辺に太陽暦を置いた場合、左辺と右辺において時制の一致が必要であり、右辺の太陽暦に合わせるためには、左辺のスス暦の過大な穂（年）を補正する必要がある。」と述べていた。

（式　）スス 暦 の 穂（年）×（１÷過大な穂（年）の補正値）＝太陽暦の年

また、この式の長所は、スス暦の 10 件を計算した経過穂の増加値が使用可能である。

（式_改）１０件の増加穂（年）×（１÷過大な穂（年）の補正値）＝太陽暦の年

更に、太陽暦の年は、通常の１年３６５日、１２ヶ月、１と月約３０．４１６７日が使用可能であることである。だが、不明な点は、過大な穂（年）の補正値である。

（８）過大な穂（年）の補正値

条件

アマテル神の生まれ日を除く 9 件について、太陽暦の１年 365 日時に於ける１日の刻み穂を 1 穂～32 穂に変化させ、その時の鈴枝穂の経過穂と月日ついて、記述値と計算値を比較した。なお、一致率は太陰太陽暦（3 年、37 ヶ月）と太陽暦（3 年、36 ヶ月）の比較のため、誤差範囲を「±2 月以内」とした。

判定結果

記述値に対し計算値の月名を比較した。その結果、「±2 ヶ月以内」の月誤差を一致と見做し判定した結果、一致率が 8 割に達したのは、1 日 9 穂（*1）と 1 日 16 穂+32 穂（*2）の組み合せのみであった。他は 7 割以下だった。

また、一致率 8 割以上を対象に過大な穂（年）の補正値の可否の判定方法として、ヲシヒトとアマテル神の親子の年齢差を比較対象とした。その結果、長子のヲシヒトが天日嗣した時のアマテル神の年齢は、1 日 9 穂時が 73 歳。また、1 日 16 穂時が 41 歳であった。この結果、1 日 16 穂+32 穂（*2）の組み合せが月日の再現性が高かった。

1 日 1～16 穂の計算表		月の誤差、月数毎の件数					一致率	計算値
1 年の日数	１日の穂	0 月	1～2 月	3～4 月	5～6 月	計	0～2 月	歳
365 日	1 穂	1	4	4	2	10	0.4	658 歳
365 日	2 穂	1	6	2	1	10	0.7	329 歳
365 日	3 穂	0	5	2	3	10	0.5	219 歳
365 日	4 穂	0	6	1	3	10	0.6	164 歳
365 日	5 穂	0	2	6	2	10	0.2	131 歳
365 日	6 穂	0	4	5	2	11	0.4	109 歳
365 日	7 穂	1	3	4	2	10	0.4	94 歳
365 日	8 穂	1	3	5	1	10	0.4	82 歳
365 日	9 穂	0	8	2	0	10	0.8*1	73 歳
365 日	10 穂	0	6	1	3	10	0.6	65 歳
365 日	11 穂	1	6	0	3	10	0.7	59 穂
365 日	12 穂	2	5	2	1	10	0.7	54 歳
365 日	13 穂	0	2	5	2	10	0.2	50 歳
365 日	14 穂	1	4	3	2	10	0.5	47 穂
365 日	15 穂	0	5	0	5	10	0.5	43 歳
365 日	16 穂	1	6	1	2	10	0.7	41 歳
365 日	16 穂+32 穂	1	7	0	2	10	0.8*2	41 歳

1日17～32穂の計算表		月の誤差、月数毎の件数					一致率	計算値
1年の日数	1日の穂	0月	1～2月	3～4月	5～6月	計	0～2月	歳
365日	17穂	0	6	3	1	10	0.6	38穂
365日	18穂	1	3	2	4	10	0.4	36穂
365日	19穂	1	5	3	1	10	0.6	34穂
365日	20穂	2	4	3	1	10	0.6	32穂
365日	21穂	0	4	3	3	10	0.4	31穂
365日	22穂	1	4	4	1	10	0.5	29穂
365日	23穂	0	2	6	2	10	0.2	28穂
365日	24穂	0	5	3	2	10	0.5	27穂
365日	25穂	1	5	4	0	10	0.6	26穂
365日	26穂	0	5	5	1	10	0.5	25穂
365日	27穂	0	4	3	3	10	0.4	24穂
365日	28穂	0	5	1	4	10	0.5	23穂
365日	29穂	0	2	5	3	10	0.2	22穂
365日	30穂	0	2	3	5	10	0.2	21穂
365日	31穂	0	3	5	2	10	0.3	21穂
365日	32穂	0	7	0	3	10	0.7	20穂
365日	32穂+64穂	0	7	1	2	10	0.7	20穂

（９）まとめ

鈴枝穂と月日の関係について、上記のように調査した。その結果、記述月名と計算月名の一致率（2月以内）とアマテル神が結婚されてから初子のヲシヒトとの親子の年齢差の二つを考慮し判定すると、前述した「過大な穂（年）の補正値」の入力条件は、「1日の刻み穂を21鈴～26鈴までは16穂、27鈴～50鈴までは32穂」とすることが最適であった。なお、この場合の月名の誤差月の詳細表は、次頁をご覧下さい。

ヲシヒトの天日嗣時の推定歳　　表

NO,	氏名	ヲシヒトの天日嗣時の推定歳	
		1日9穂	1日16穂
1	アマテル神	73歳	41歳
2	ヲシヒト	年齢不明 (注3)	年齢不明 (注3)

(注3)タケヒトは、15歳で成人と認められていた。

16 穂+32 穂の組み合わせ時の経過穂と計算月日の値と誤差値

アヤ（綾）	ホツマ記述 鈴枝穂の穂	計算値 経過穂	計算値 月日	ホツマ記述 月日	計算値 誤差（月）
４－　２４	1207531	起点　0	１月１日	初日	一致
６－　　１	1207618	87	１月	弥生朔日	２月
１９Ｂ－　１	1447858	240327	２月	春の初日に	１月
２０－　　１	1501001	293470	４月	弥生	１月
２１－　　１	1501043	293512	４月	弥生初日	１月
２４－　　６	1710098	502567	１月	如月　朔日	１月
２５－　　１	1860023	652492	11 月	ウ月初	５月
２６－　　１	2102078	894547	８月	弥生望	５月
２７－　２２	2511060	1303529	８月	ハ月四日	一致
２７－　４１	2934661	1727130	11 月	初三日	２月

天の原　１６穂居ますも　１と日とぞ　　改訂 2019.7.11(表の追加)

【解釈】

スス暦が始まった当初より、「１日は１６穂」で数えていたと判明。（吉田説）（2011 年 4 月 16 日発表）

解説の詳細

天の原　十六穂居ますも　一と日とぞ（４アヤ）の Web 訳

尊んでアマノハラミとも、アマノハラとも呼ばれます。１６穂の歳月は、あっ、という間に過ぎてゆきました。

（感想）

上の文章の訳は、漢語ことわざ辞典の「十年一日の如し」を似ているようです。更に、原文と比較しますと、「ヒトヒトゾ（一日とぞ)」の解説が抜けており、「あっ、という間に過ぎてゆきました。」が挿入されているようです。

ヲシテ原文　　カナ文

　　アマノハラ　ソムホイマスモ　ヒトヒトゾ

（注 5）

穂を年と思われている研究者がいるが、ホツマ・ヱト表を見て頂くとわかるが、キアヱ～ネエトまでのヱトの一つ一つは「穂」と呼ばれる。本文では、「なれば二ヱト　キアヱより　枝と穂と数ヱ」と記述していることからもわかると思う。

仮に穂を年とすれば、「なればニヱト」となると、６０年後のキアヱより枝と穂を数えたとします。だが、６０年後に暦を読んでいた人が生存しているか疑問です。現在でも、竹の寿命は約６０年と云われておりますが学術的な実証はとれておりません。

天の原　十六穂居ますも　一と日とぞ

１６穂に隠された「ヒトヒトゾ」の意味を調査するため、ホツマツタヱより「年キシヱ」、「十一穂」の文章を抜粋すると、下記のように、鈴枝穂の文章が抜粋されます。

（１）二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ　（ヱト番号３１）

（２）二十五鈴　百枝　十一穂(キウヱ)

この「キシヱ(３１)」「十一穂(キウヱ)」は、鈴枝穂の穂であり、ヱト順位の呼称、または、ヱト順位の番号を表すようです。同じように「十六穂（オミト）」もヱト順位番号の「１６」になります。

そこで、「十六穂居ますも　一と日とぞ」の「居ます」も含めて考察しますと、「居ます」は「経過期間」であり、「十六穂」もホツマ・ヱト番号の「１（キアヱ）」～「１７（サヤヱ）」番目までのヱトの経過で表すことができます。そうしますと、「十六穂居ますも　一と日とぞ」を云い換えますと、「アヱよりヤヱの　ヱトの十六穂」とも云え同じ意味を表します。

暦法より見た正しい解釈

前述の調査結果より、「アマノハラ　ソムホイマスモ　ヒトヒトゾ」の意味は、「天の原は、１～１７番目までの中１６穂居ても　一日と成るぞ」と強調（とぞ）しておりました。更に、暦法で表しますと、アマテル神の頃は「一日を１６穂で数えていた」ことになり、「天の原　十六穂居ますも　一と日とぞ」も、「アヱよりヤヱの　ヱトの十六穂」で成り立っていた。

アヱよりヤヱの　十六穂の検証

それでは「十六穂」を検証して見る。起点は、「〇アヱ」とする。下表のホツマ・ヱト表を参考すると、ヱト番号１の「キアヱ（　１)」が起点となる。次に、「十六穂居ますも　一日とぞ」の原文より「キアヱ（　１)」が起点にして、前に１６穂進めると、ヱト番号１７の「サヤヱ（１７)」に辿り着く。すると、「キアヱ（１)」より「サヤヱ（１７)」に経過したことがわかる。このことから「〇アヱ」より「〇ヤヱ」に経過したことがわかる。また、ヱト番号で見ると、ヱト番号１よりヱト番号１７に移動し、経過が１６ヱトであることもわかる。

更に、下表の中には、「〇アヱ」より「〇ヤヱ」が、同じように五ヶ所含まれているため検証すると、その結果は下表の抜粋ヱトの通り、全てが１６ヱトの間隔になっていた。

下表の抜粋ヱト

「キアヱ（　１）」より「サヤヱ（１７）」の１６ヱト・・１日１６ヱト

「ツアヱ（１３）」より「ネヤヱ（２９）」の１６ヱト・・１日１６ヱト

「オアヱ（２５）」より「キヤヱ（４１）」の１６ヱト・・１日１６ヱト

「サアヱ（３７）」より「ツヤヱ（５３）」の１６ヱト・・１日１６ヱト

「ネアヱ（４９）」より「オヤヱ（　５）」の１６ヱト・・１日１６ヱト

結論

「天の原　十六穂居ますも　一と日とぞ」は、前述の如く、ホツマ・ヱトの「アヱよりヤヱ」の法則で解説が可能であった。このことから、「天の原では、ホツマ・ヱトの１６ヱトの数えで１日としていた。」ことが立証されます。

ホツマ　ヱト表　　識別：同じ色が対比ヱトである。

キアヱ（　１）	キアト（　２）	ツミヱ（　３）	ツミト（　４）	オヤヱ（　５）	オヤト（　６）
サシヱ（　７）	サシト（　８）	ネナヱ（　９）	ネナト（１０）	キウヱ（１１）	キウト（１２）
ツアヱ（１３）	ツアト（１４）	オミヱ（１５）	オミト（１６）	サヤヱ（１７）	サヤト（１８）
ネシヱ（１９）	ネシト（２０）	キナヱ（２１）	キナト（２２）	ツウヱ（２３）	ツウト（２４）
オアヱ（２５）	オアト（２６）	サミヱ（２７）	サミト（２８）	ネヤヱ（２９）	ネヤト（３０）
キシヱ（３１）	キシト（３２）	ツナヱ（３３）	ツナト（３４）	オウヱ（３５）	オウト（３６）
サアヱ（３７）	サアト（３８）	ネミヱ（３９）	ネミト（４０）	キヤヱ（４１）	キヤト（４２）
ツシヱ（４３）	ツシト（４４）	オナヱ（４５）	オナト（４６）	サウヱ（４７）	サウト（４８）
ネアヱ（４９）	ネアト（５０）	キミヱ（５１）	キミト（５２）	ツヤヱ（５３）	ツヤト（５４）
オシヱ（５５）	オシト（５６）	サナヱ（５７）	サナト（５８）	ネウヱ（５９）	ネウト（６０）

アヱよりヤヱの　中５日　　改訂 2019.7.11(表の追加)

【解釈】

（仮）２７鈴以降は、「１日は８穂」に改訂。このため、上（１）に比較し、　１日を２日に計算した年数になっていた。（吉田説）（2003 年 6 月 14 日発表）

解説の詳細

アヱよりヤヱの　中五日

下表のホツマ・ヱト表より検証すると、「中五日」を網羅するヱトの起点を「キアヱ（１）」とすると、「キヤヱ（４１）」となる。また、ヱト番号で見ると、ヱト番号１よりヱト番号４１に移動し、経過ヱトが４０ヱトであることもわかる。だが、「アヱよりヤヱの　中五日」と云っているので、「４０ヱト」を中五日で割ると、

（式）４０ヱト÷中五日＝１日は８ヱトになる。

そこで、前述の「天の原では、ホツマ・ヱトの１６ヱトの数えで１日としていた。」と単位を合わせるため、ホツマ・ヱトの１６ヱトに合わせると、「アヱよりヤヱの　中五日」は、「ニニキネのアマキミ（天君）以降は、２日で１６ヱトを数えていた。」ことになる。

更に、下表の中には、「〇アヱ」より「〇ヤヱ」が、同じように五ヶ所含まれているため検証すると、その結果は下表の抜粋ヱトの通り、全てが中４０ヱトになっていた。

（参考）「キアヱ（１）」より直近の「〇ヤヱ」は、「オヤヱ（５）」になる。そのヱト差は４ヱトであり、５ヱトとならないため不採用となる。

下表の抜粋ヱト

「キアヱ（　１）」より「サヤヱ（４１）」の４０ヱト・・１日８ヱト、２日１６ヱト

「ツアヱ（１３）」より「ネヤヱ（５３）」の４０ヱト・・１日８ヱト、２日１６ヱト

「オアヱ（２５）」より「オヤヱ（　５）」の４０ヱト・・１日８ヱト、２日１６ヱト

「サアヱ（３７）」より「サヤヱ（１７）」の４０ヱト・・１日８ヱト、２日１６ヱト

「ネアヱ（４９）」より「ネヤヱ（２９）」の４０ヱト・・１日８ヱト、２日１６ヱト

結論

「アヱよりヤヱの　中五日」は、前述の如く、ホツマヱトの「アヱよりヤヱ」の法則で解説が可能であった。このことから、「ニニキネのアマキミ（天君）以降の御世では、１日で８ヱト、また、２日で１６ヱトを数えていた。」ことが立証されます。

ホツマ　ヱト表　　識別：同じ色が対比ヱトである。

キアヱ （　１）	キアト （　２）	ツミヱ （　３）	ツミト （　４）	オヤヱ （　５）	オヤト （　６）
サシヱ （　７）	サシト （　８）	ネナヱ （　９）	ネナト （１０）	キウヱ （１１）	キウト （１２）

ツアヱ （１３）	ツアト （１４）	オミヱ （１５）	オミト （１６）	サヤヱ （１７）	サヤト （１８）
ネシヱ （１９）	ネシト （２０）	キナヱ （２１）	キナト （２２）	ツウヱ （２３）	ツウト （２４）
オアヱ （２５）	オアト （２６）	サミヱ （２７）	サミト （２８）	ネヤヱ （２９）	ネヤト （３０）
キシヱ （３１）	キシト （３２）	ツナヱ （３３）	ツナト （３４）	オウヱ （３５）	オウト （３６）
サアヱ （３７）	サアト （３８）	ネミヱ （３９）	ネミト （４０）	キヤヱ （４１）	キヤト （４２）
ツシヱ （４３）	ツシト （４４）	オナヱ （４５）	オナト （４６）	サウヱ （４７）	サウト （４８）
ネアヱ （４９）	ネアト （５０）	キミヱ （５１）	キミト （５２）	ツヤヱ （５３）	ツヤト （５４）
オシヱ （５５）	オシト （５６）	サナヱ （５７）	サナト （５８）	ネウヱ （５９）	ネウト （６０）

ホツマツタヱ暦（スス暦、アスス暦）

　ホツマツタヱには、一日の数え穂が「１日は１６穂」→「１日は８穂」に改暦された記述があった。このことを長年に渡り研究すると、「天の原　１６穂居ますも　１と日とぞ（１日は１６穂）」に対する　「アヱよりヤヱの中５日（１日は８穂）」の御世は、１日を２日に計算される「年、月」の経過日数になっていた。このことにより、「スス暦（２７鈴以降）」「アスス暦」は、２倍化暦、長大化した長暦（暦）の暦法で成り立っている」ことが判明した。（吉田説）

アスス暦の暦日解読（計算三八五）式

　アスス暦を旧暦の太陰太陽暦と対比するため、アスス暦の暦日の２１個を用い、太陽暦の年月日の式を利用して、ホツマ・日ヱト（計算上は順位番号で照合）を丹念に計算しますと、ホツマ・ヱトが一次照合する一年の日数は約三百八十五日であった。なお、一次照合できなかったホツマ・ヱト部は、入力月を「±1 月」変化させると、ホツマ・ヱトは二次照合ができ、当該ホツマ・ヱト部は閏月の個所と思われる。計算精度は一次、二次照合とも「±1 日」であった。（吉田説）

アスス暦の暦日解読（計算二六五）式

一年約三百八十五日は一年約三百六十五日（太陽暦）より長いため、他の暦日が隠れていないかと丹念に計算を繰り返しました。すると、同じアスス暦の暦日の２１個よりに計算しますと、二つ目の計算式で、一年は約二百六十五日で成り立つことが判明した。なお、閏月、計算精度は前述の計算三八五式と同じであった。（吉田説）

アスス暦の太陽暦　　改訂 2019.7.11(表の追加)

アスス暦の一年約三百八十五日と一年約二百六十五日を組み合わせると、現在の太陽暦に相当する暦が隠れていた。（吉田説）

暦　名	1 年の日数	年	経過日数	式の説明
太陽暦	365.2425 日	1 年	365.2425 日	a
同　上	365.2425 日	19 年	6939.6075 日	b
アスス暦（１）	384.194880822673 日	16 年	6147.11809316277 日	c
アスス暦（２）	264.194653934799 日	3 年	792.583961804397 日	d
アスス暦	合計		6939.70205496717 日	e=c+d
アスス暦と太陽暦	合計日数の差	19 年	0.0945549671696426 日	f=e-b
アスス暦	平均日数 -	19 年	365.247476577219 日	g=e/19
アスス暦と太陽暦	平均日数の差	1 年	0.00527657721897867 日	h=g-a

アスス暦の太陰太陽暦

ホツマツタヱのアスス暦は、太陰太陽暦であると云われていたが、吉田の研究により閏年の発生パターンが発見され太陰太陽暦が証明されるに至った。(吉田説)(2015_4_22 発表）

アスス暦の閏年の発生パターン　　改訂 2016.6.28

アスス暦の記述には、閏月の記述はない。引いて云えば、アスス暦の前の暦であるスス暦には、「６－１０　これを暦の　うりふ月」の記述かある。このため、アスス暦の記述を基に、アスス暦の暦日再現式を作成し計算すると、月名に「+1（閏月)」することで、任意年、任意月、任意日の日ヱトが記述の日ヱトの順位番号に一致する暦日の記述になる。「この暦日のアスス暦の年数より、閏年の発生パターンを求めると、１９年の一巡で、３年、６年、９年、１３年、１４年、１７年の６年（回）に閏年が発生していることが掴める。(吉田説)」（なお、日本書紀暦日原典の閏年の発生パターンとは違っており、別の暦法のようである。）

アマテル神の生まれ

　イサナギの妃であるイザナミが妊まれて、アマテル神が生まれるまでの期間について、ホツマツタヱは「妊めとも 十月に生まず ・・・・ 九十六月 生れませる アマテル神ぞ」と記述している。そのため、記述を信じると妊まれてから８年（９６ヶ月÷１２ヶ月）に生まれたとなる。そのため、アマテル神の生まれについて、ホツマ神話としての解説、また、自然科学説を基にした解説の二つの解説を下記に準備した。

（１）ホツマ神話としての解説

アマテル神の誕生

　ホツマ神話が作り出した神話であり、「日の輪の御魂を、イサナミにコソム（96）月も宿らせて誕生される」と云う、自然科学で説明できない物語であった。（吉田説）

１、アマテル神の胎生期間96月について

1)ホツマの文章確認

(1)4アヤ(綾)を読みますと、次の文章のように「アマテル神は、コソム(96)月に　あれ(生)ませる」と記述しておりました。

4―23～24

トコミキハ	クニウムミチノ	床御酒は	国生む道の
オシヱゾト	カクマシワリテ	教ゑぞと	かく交わりて
ハラメトモ	トツキニウマズ	妊めとも	十月に生まず
トシツキオ	フレトモヤハリ	年月お	触れともやはり
ヤメルカト	ココロイタメテ	病めるかと	心痛めて
コソムツキ	ヤヤソナワリテ	コソム(96)月	やや備わりて
アレマセル	アマテルカミゾ	あれませる	アマテル神ぞ

(2)一方、14アヤ(綾)を読みますと、『この頃は、鈴暦の25鈴は、アマテル神は神上がりされてないにも関わらず、「天照る国は　わが御魂　ありと知るべし」と記述しており、人間でなく、「わが御魂」を暗示するように「ありと知るべし」』と記述しているようです。

　また、「われ、昔」の昔は、4アヤ(綾)のアマテル神が生まれた時のことを指していると思われる文章であり、4アヤ(綾)でも、すでに人間でなく、「わが御魂」と述べていると察せられます。そして、「御魂」の動静が「日の輪～九十六月の生れ」までの文章に、次のように述べていると察せられるようです。

14―30～32

	アマテルクニハ		天照る国は	
ワガミタマ	アリトシルベシ	わが御魂	ありと知るべし	
ワレムカシ	ヒノワニアリテ	われ、昔	日の輪にありて	← 4アヤ(綾)のこと
テラセトモ	ヒトミオウケズ	照せとも	人身お受けず	

ミチヒカズ	フタカミタメニ	導かず	両神ために
タラチネト	ナリテマネケハ	たらちねと	なりて招けは
ヒトノミト	ナリテハラメド	人の身と	なりて妊めど
ナガヰシテ	コソムツキマテ	長ゐして	九十六月まで
クルシムル	ヤヤウマルレド	苦しむる	やや生るれど
ミヒタシニ	ヒトヒモヤスキ	身養しに	一日も安き

2、あれませる、あれの意味

(1)ホツマの記述

ホツマツタヱには、数多くの「うまれ」の記述がありますが、「あれませる」の記述表記は、アマテル神、子のヲシヒトのみになります。辞書では、神聖なものが生まれるとなります。また、万葉集では、「あれ」を「天上の世界から生まれて来た」と述べているようです。このことからも、アマテル神は天上の世界から来た神聖な神だったことが察せられます。

A、古語辞典の解説

古語辞典を見ますと、「あれませる」、「あれ」が掲載されております。この「あれ」の解説を見ますと、「上代語の神々や天皇など神聖なものが生まれる。出現する」 となっております。

B、万葉集

万葉集には、「あれ」を説明する短歌が掲載されております。

短歌

「久方の天の原よのあれ来る神の命」があり、訳は「天上の世界から生まれて来た祖先の神よ」

3、まとめ

前述の結果より、4アヤ(綾)のアマテル神の生まれを、14アヤ(綾)で補足説明しており、その文章の「日の輪にありて　照せとも　人身お受けず　導かず　両神ために　たらちねと　なりて招けは　人の身と　なりて妊めど　長ゐして　九十六月(の生まれ)まで」は、人間の生まれる過程の説明でなく、「あれませる」、「あれ」より、御魂が天上から地上におりて、イサナミのお腹を借りて生まれたこを説明していると思われます。

また、その裏付けの根拠は、胎生期間が人間は十月に対し「天照る国の　わが御魂」は、コソム(96)月であった。このことより、アマテル神は、御魂(天上の精霊)であったと申す以外にないと察せられます。このことは、アマテル神の誕生をホツマ神話で語っていると察せられます。

（２）ホツマ神話としての解説

アマテル神の誕生トリック

人間は生理学上において、受精～出産までは２６６日と云われており、１ヶ月２８日で計算すると、９ヶ月と１４日になる。アマテル神が生まれるまでの九十六月は、生理学上はありえない日数である。このため、九十六月の記述は、誤植と考えられる。その

誤植の原因は、「月」の記述の位置にあると想定される。本来の記述は、「九十六月」に対し「九月十六（日）」ではなかろうか。その場合の日数は１ヶ月２８日で計算すると、「２６６日」に対し「２６８日」になる。この「２６８日」は、上の生理学上に求めた２６６日に対し僅か＋２日違いてある。

　このように考えると「九十六月」の記述は、ホツマのトリック記述と云わざるお得ない。このトリックは、タチカラオの「三十六月」、サルタヒコの「十六年」にも残されており、３人に共通する数値は「十六」である。「十六」を残して、３人の生まれるまでの期間を作為的に記述されたと想定される。（吉田説）

オノコロ

　ホツマツタヱには、オノコロの言葉の説明はない。そのため、記紀では、前後の文章より大凡「自ら固まる島」と訳されている。だが、ホツマツタヱには、島以外に、「生命の核?」「人の思い?」と察せられる文章もある。そこで、オノコロの言葉の幅を広げて、「オ＊ノ＊コ＊ロ」よりホツマツタヱを検索すると、「ミオヤノココロ」、「オヤノココロ」の言葉がヒットする。現在文に置き直すと、　　「天御祖神の心」、「祖神の心」になる。天御祖神は、初代アマカミ（天神）の　　国常立が祭った神になる。このことを考慮してオノコロの意味を考えると、　　「オノコロとは、御祖神の御心（吉田説）」と訳すると全てに訳が当てはまる。

サキリ

　サキリを一音節で訳すると、「サ（南）」「キ（東）」「リ（離れる）」になる。　　この方角はどこから見た方角になるかと云えば、常世国より見た方角の土地になる。国常立は、この土地より地方の国造りのため、八人との皇子を「クニサツチ」に赴任させた。このことから、「常世国のサ（南）キ（東）の方向の土地を離れ（リ）てクニサツチの国に赴任することをサキリの道（吉田説）」と云う。

サツチ

　サツチを一音節で訳すると、「サ（南）」「ツ（西）」「チ（方角）」になる。この方角は常世国より見た、南西の方向になる。「クニサツチの意味は、サ（南）」「ツ（西）方向（チ）にある国であることがわかって来る。（吉田説）」

フトマニ

　フトマニの語源は、フトマニの言葉を逆に読むと「ニマトフ・二間飛ぶ（吉田説）」であった。フトマニ図の一音のヲシテが記述された円か、内２円、内３円、外４円の３

円あるが、文字は右回りに順よく記述されている。文字を読む場合は、「二間飛ぶの法則（吉田説）」を守って読むことで、ホツマツタヱの記述の文章に一致する。

フトマニの占い方法

　フトマニ図の内２円の文字の８音を最初の１グループとする。次に、内３円＋外４円（３２神）の内外の二文字を綴り１６音を二番目の１グループとし、２つのグループに分ける。（吉田説）

　そして、占う時は、最初に８音のグループの１音（仮にシ）を選択し、次に、二番目のグループより二文字を綴った１音（仮にハラ）を選択する。占い結果は、合わせて読むと「シハラ（例）」となる。また、フトマニで占える組み合わせの総数は、１２８通りになる。

二人のアマテル神

　男性のアマテル神は、神上がられて丹後半島の天真名井に眠っておられる（ホツマツタヱの記述）。一方、アマテル神は女性と云われる説は、神功皇后の御世において、ムカツ姫を天照大御神荒魂（神社名監）、天照大御神之荒御魂と申し奉る神である（廣田神社由緒記）と記述されており、この神は、伊勢の伊勢皇大神の御別体(神社名鑑)と記述されており、アマテル神は２人いたことになる。

　世間において、女性のアマテル神と云われるのは天照大御神荒魂を指している。また、天照大御神荒御魂とは別に、天照大御神和御魂（神功訓注）が皇居におられるとのことである。ここまで調べて来ると、アマテル神は２人居るとするのが正しいようだ。（吉田説）

メグロ

　メグロと云えば、現在では東京都の目黒区が有名であるが、横浜市瀬谷区にも目黒町がある。この目黒町は、国道２４６号と国道１６号の交差する立体交差点になっている。この目黒町の名付けられた語源は不明であるが、ホツマツタヱには、目黒と同じ名称を有する「彼は目黒と　その里お　名付け賜る」との文章が記述されている。その「目黒」の意味は、「メク＋ロ」から「見えない＋ロ)」となり、「辺りが見えない」と訳できそうである。

　現に東京方面より国道２４６号を厚木市方向に向かうと、この目黒町より西の隣町（大和市）では、ハラミ山（富士山）が大山山系、丹沢山系に隠れて見えなくなる。この「隠れて見えなくなる」ことと前述の「辺りが見えない」が「メグロ」の語源と思われ、その見えなくなる開始点が、「メグロ」の始まりになり、その地点に目黒町があると思われる。（吉田説）

オシテ、ヲシテ

オ（ヲ）シテの意味を「文字」と解釈する資料を目にすることがあるが、ホツマツタヱよりオ（ヲ）シテを抜粋し整理して見ると、オ（ヲ）シテを文字とする記述が１３％、文章、授書、勅書などを璽（天子の印章）とする記述は８７％であった。この判断より、ホツマ文字で書かれたものをオ（ヲ）シテでと云ようである。後世には、璽（天子の印章）、勅書（天子の意思を文字にして文章）を指すようになった。（吉田説）

ウムスギサカメ

ウムス（ギ）とは、畑を耕すこと（大辞）、サカメとは、目を逆立てることである。このことから、ウムスギサカメとは、掘り上げた土を逆立て（裏返す）にして崩すことを云う。（吉田説）

マメスメラ

マメスとは、まぶす（大辞典）ことであり、メラとは、ども、たち、（ガキめら）を云う。このことから、マメスメラとは、多くの土を平らにまぶすことを云う。（吉田説）

メグリ、メクリ

ホツマツタヱには、「メグリ」「メクリ」の言葉が８２件記述されている。その内、８１件が「物のまわりをめぐること。順に従ってまわること。」を意味する「巡り」である。他の１件の「メクリ」は、「メクリヒラケル」の「メクリ」である。注意深く見ると、「メクリ」には「運（メグ）り」の言葉を当て嵌めことができる。意味は「定まったとおりにめぐり行く」、「めぐりあわせ。（運勢・運命」の意味も含まれているようである。このことより「メクリヒラケル」の訳文は、「運（メグ）り開ける」→「運命が開ける」と訳できるようである。このように考えて来ると、「運（メグ）り開ける」の意味は、近代で云う所の「神社などに百度参り」する言葉と思え、ホツマツタヱの「運（メグ）り開ける」が、「百度参り」の原形と思えて来た。（吉田説）

メグリを運（メグ）りと訳文される２例

「昔両神　筑波にて　御巡り問えは」

訳文

「昔、イサナギ、イザナミの両神は、筑波山にて　良い世嗣が生まれることを願われて、運（メグ）りされ、後に、女神のこと、男神のことについて問えは（れました。）」

「オノコロの　八尋の殿に　立つ柱　巡り生まんと」

訳文

「オノコロ（天御祖神の心）のこもった八尋の殿には、土間の中央に大きな柱があり、その柱は天御祖神の心をお祭りするための立つ柱でした。イサナミの后はその立つ柱の外周を運（メグ）り願われ、このことで、天上の運が開けて日の神の皇子を生まんと　言挙げに」されたのでした。

アワチ

アワチと聞きますと、兵庫県に淡路島がありますので淡路と思いがちです。それも仕方がありません。現在、兵庫県淡路市多賀に伊弉諾神宮が鎮座していることからも、一般的には淡路と思いがちです。だが、３アヤ（綾）のイザナミは御子を「歌ひ妊めど　月満てす　胞衣破れ生む　ヒヨル子の　泡と流るる」の文章を知っておれば、「葦舟に　流すアハチや」のアハチは、「泡と流るる」の掛詞であり、「泡路」と解釈する方が妥当と思われる。

チマキ

アマテル神の頃の稲作は、陸稲だったことが推定されます。その根拠は、１アヤ（綾）の「アヤメにチマキ」の文章です。この「アヤメにチマキ」は単なる掛詞でなく、植わっている場所が関係していると思われます。そもそも日本産のアヤメが植わっている場所は、半乾燥地の畑の淵が多いようです。そのため、畑には稲を植え、畑の淵にアヤメが植わっていることが一般的な日本の風景でした。このようにて、アマテル神が天の安河の磐屋より出た後に食べられたチマキは、陸稲の米であったことが推定されるようです。それに対し、支那産の菖蒲（ショウブ）は湿地帯に植わっております。今では川沿い、池の淵で目にする菖蒲の看板もアヤメ（菖蒲）の表記になっていることからもわかると思います。そして、ホツマの記述が「ショウブにチマキ」であったら、チマキは水稲の米になっていたと思われる。（吉田説）

今の世は　ただ二万歳　（参考値：現在値に換算できてないため）

ホツマツタヱには、御食の回数と人の年齢（寿命）が記述されております。だが、１と月の食事の回数が増えると、寿命が極端に短くなると説明されておりました。そした、「今の世は　ただ二万歳」と記述されておりますが、肝心の御食の回数が未記述でした。概算の計算式になりますが、下表のように計算しますと、「月３０食」になるようです。但し、②を月６食としますと、月２４食になる。（吉田説）

ＮＯ,	御食の回数	寿命	計算式（吉田説）	御食の回数
①	月三食の	人は百万（歳）に		
②	月六食の	人は二十万（歳）	月３食×（１００万÷２０万）×(８÷１６)	月７．５食
③	今の世は	ただ二万歳	月６食×（２０　万÷　２万）×(８÷１６)	月３０食

サカム

　ホツマツタヱには、「サカム」の国名が、九ヶ所も記述されている。この「サカム」の国は、江戸時代までの「相模国」と同じ地名と思っている人が多いようだ。そこで、大化の改新以前まで遡って調べると、「相模国」は「サカム（相武）国」と「シナガ（師長）国」とに分かれていたことがわかる。この二つの国を「相模国」内で二分すると、現在の神奈川県の県央地区が「サカム（相武）国」となり、西部地区が、「シナガ（師長）国」であったようだ。

　このことから、ホツマツタヱの「サカム」の漢字表記は、相武（サカム）が正しいことになる。また、漢字の相模のカナ表記は、「サガミ」であり大化の改新以後の表記に限定されるようだ。

トツキ

　トツキの語源を遡って考えますと、「トツキ」は、ヲシテでは「十月」のことを云っており、この十月、十ヶ月は、子供を妊む期間の「十月十日」の「十月」より来ていると思われるようです。そして本来の嫁ぎとは、「十ヶ月間、お腹に子供を妊むこと」を語源にしていたと思われます。そして、トツキ（十月→嫁ぎ）に変化した時期をホツマツタヱより推定しますと、クニトコタチ、クニサツチ、トヨクンヌの御世の頃は、十ヶ月間の子供を宿すことを「十月（トツキ)」と云っていたと推定されます。そして、次のウビチニ、スビチニの御世になり、「この時に　皆妻入れて（２アヤ（綾）14)」の記述からも推定できるように、「トツキ（十月)」が、「トツキ（嫁ぎ)」の意味に変化して行ったと思われ、また、その後の漢字の渡来後により、「嫁ぎ」の字を当て嵌めて、「トツキ」は「嫁ぎ」を指す言葉に定着したことが容易に推定されます。（吉田説）

マエ山、アワミサキ

　景行天皇の御世に筑紫に遠征された時に、八女を超えて秋の静かな有明海の向こうに見えたマエ山、アワミサキは、現在の「眉山（方言ではマエヤマと呼ぶ)」、「大三東」であった。（吉田説）

サクスス

　ホツマツタヱに、「サクススナレバ　ウエツギテ」の言葉があるが、「折鈴なれば　植え継ぎて」と書きたいが、辞書を見ると「拆鈴なれば　植え継ぎて」が正しいようである。

　拆「学研・漢和大辞典」意味・・ひらく、さく（打ち割って二つにさく。）

妊みて生まず　二十一月　経て師走望　・・・・　双子生む

　この二十一ヶ月に双子が生まれた記述は、アスス暦が２倍化暦であった根拠になります。そのことの感受性がなく、この文章を何気なく読むと、「そうなんだ」、「昔は２１ヶ月でも生まれたんだ。」となり、やり過ごしてしまいます。そして、１３６歳の天皇の年齢にも、昔の人は長生きだったと肯定しまう間違を起こすようです。このような間

違いを起こさないために、昔の日本人の寿命を調べて見て下さい。インターネット情報でも、「現在人の半分以下」だったことを知ることができます。（吉田説）

【アスス暦が２倍化暦であった根拠】の記述
３８アヤ（綾）３～５
景行天皇の２年弥生（三月）のことです。吉備津彦の女（娘）が立たれて正皇后になられました。名前は、播磨のイナヒオイラツ姫です。姫は、内待（副皇后の位置）の時に妊まれ、去年（初穂）ウ（４）月に妊みて十月（１０ヶ月目）に生まず、フソヒ（２１）月も 経て、２穂の師走（１２月）望に・・・双子を生む（お生みになりました）。双子の兄の名はモチヒトのオウス皇子、弟の名はハナヒコのコウス皇子と云いました。
（注記）赤文字：ホツマツタヱの直訳文を示す。

【解説】
ヤマトタケこと、ハナヒコのコウスが、生まれた時の記述です。母である　イナヒオイラツ姫は初穂４月に妊まれて、１０月１０日の出産予定月は２穂　１月だったのです。だが、予定月になっても生まず、２１月も経った２穂の　師走（１２月）の望に、双子を生みになったとの記述です。

植ゑ継ぎ五百に、五百継ぎの
五百継ぎは、未だ世間では、「マサカキを五百本も植え替えた」と思っているようです。だが、五百の言葉が使用されている２アヤ（紋）と４アヤ（紋）の例を比較しますと、３世代も違う「ウビチニ」と「タマキネ」の御世に対し、当然、マサカキの植ゑ継ぎ本数も違うことが容易に推測されます。だが、「五百」と記述された文章は、３世代の違いに関係なく「植ゑ継ぎ五百に」、または、「五百継ぎの」と記述されており、このことから、この文章は、マサカキの本数を正確に記述しているのでなく、抽象的にマサカキの植ゑ継ぎ本数を表わしていると推定する方が妥当と思われます。詳細は、下記の表、文章をご覧下さい。

表　アマカミ（天神）とタカミムスビの系図比較

アマカミ（天神）	１代	２代	３代	４代	５代	６代	７代
	クニトコタチ	クニサツチ	トヨクンヌ	ウビチニ	ツノグイ	オモタル	イサナギ
タカミムスビ			１代	２代	３代	４代	５代
		ハゴクニ	東の君	二代	三代	四代	タマキネ

記述の比較
２アヤ（紋）【本文】
マサカキの　植ゑ継ぎ五百に　満る頃　世継ぎの男カミ　ウビチニの　スビチお入るる

４アヤ（紋）【本文】

　五百継ぎの　マサカキも植ゑ　世々受けて　治む五代の　ミムスビの　ヰミナタマキネ　モトアケお　　遷す高天に　天御祖　モトモトアナレ　三十二神　祀れば民の

天枝

　「天のマサカキ　年の穂の　十年には五寸　六十年に　三尺伸ぶヱトの　一周り明くる年なる　三尺の天枝（２８アヤ（綾）４、５）」の記述より、六十年を天枝と云うようです。

植ゑ継ぎ

　今まで、「故に千枝の年　種植ゑて　明くれは生ゆる（２８アヤ（綾）６、７）」と記述している所から、（１）種を巻いて→（２）成長→（３）サクスス（枯れること）→（１）サクスス前に別に種を巻き→（２）成長→（３）サクスス（枯れること）マサカキの「植え継ぎ」と理解しておりました。

　だが、植える、継ぎは、まったく別なことでありことに気付きました。植える（大辞林）とは、植物の根や種を土中に埋めて育つ状態にする。また、継ぎ（大辞林）には、継ぎ竿、破り継ぎ、スカートの穴に同じ布で継ぎを当てたなどの意味がありました。そこで、植ゑ継ぎの意味を考察しますと、「植える」から判断しますと、最初は種を巻いて育てたが、千枝になる前にマサカキの成長が止まるなどがありあった場合は、「継ぎ」の作業を施すため、新芽やら伸びた枝を土に挿し木する、また、他の木にマサカキを継ぎ木して千枝まで寿命を伸ばしたことが考えられます。そのため、この一連のことを植ゑ継ぎと記述したようです。このことを証明するように、千枝では種を巻くが、天枝では種を巻いたとの記述はありませんでした。

イトリ

　イトリの意味は、「居鳥」のことである。そのイトリは、イトリ（居鳥）、ニイトリ（丹居鳥）、シライトリ（白居鳥）、シラトリ（白鳥）などと呼ばれ、イトリ（居鳥）は居る鳥であり、現在の留年鳥にあたる。また、ニイトリ（丹居鳥）は頭部の赤色をも表わしていると推測され、シライトリ（白居鳥）は羽根の白色に該当するようである。この３点の特徴が一致する鳥を捜すと丹頂鶴になる。現在、丹頂鶴は釧路湿原などに生息しておりますが、江戸時代は江戸近郊に飛来地があったとされ、絵師の歌川広重の「名所江戸百景」に江戸に飛来していた丹頂鶴を描かれていた。なお、類似の鳥の白鳥もシラトリとも読めるが、白鳥はシベリアなどからの渡り鳥であり、留年鳥を意味する「居る鳥」→「イトリ（居鳥）」にはならないようである。

　ホツマファンのために、「イトリがなぜに居鳥になるか」を解説すると、それは神社に建立されている鳥居を想像するとわかって来る。トリイを漢字で記載する鳥居になる。これと同じ理屈でイトリを漢字の居鳥であるとの証明が成り立つ。（2016 年 5 月 2 日、吉田説）

　なお、「イ」を「風」と訳して「風鳥」また、「位鳥」と訳した研究者がいたが、ニイトリ、シライトリ、シラトリなどは「風鳥」や「位鳥」にならないようである。

ヲシテ文献研究体系　.

５０年周年を機会に、ヲシテ文献研究体系を公開しました。なお、当ｈｐは、解読ヲシテ学とヲシテ難原語を主体に研究し、最低でもヲシテ複原語は認識し、「ヲシテ（カナ字)」と一次直訳と解説を併記しております。

研究科目

ヲシテ文献　　（　ホツマツタヱ、ミカサフミ、フトマニの三書を云う　）
　Ｌ→ヲシテ学
　　Ｌ→（１）解読ヲシテ学＋（２）原語ヲシテ学
　　Ｌ→①ヲシテ複原語＋②ヲシテ難原語

ヲシテ学

ヲシテ（文字）を学問の基本に置き、ホツマツタヱ、ミカサフミおよび、フトマニを学問的に研研究することをヲシテ学と云い（2016 年 4 月 1 日、吉田説)、解読ヲシテ学と原語ヲシテ学より構成される。(2016 年 8 月 30 日、吉田説)　　ヲシテの表記は、カナ文字となる。

（ご参考）

ヤマトコトバ、呉語、漢語を併記する場合は、識別として呉語、漢語を、後（　）内に表記する。また、ヤマトコトバ、呉語、漢語の有無の判断は、漢和大字典（藤堂明保編）の利用は有用である。

（１）解読ヲシテ学

スス暦、アスス暦などを暦法により解読、フトマニの占い手法を解読するなど、ヲシテの文化を歴史として解読、証明する研究を解読ヲシテ学と称する。(2016 年 8 月 28 日、吉田説)

（２）原語ヲシテ学

古代日本には漢字渡来以前にヲシテと云う文字が存在した。だが、我が国は漢字文化が謳歌してすでに約 1650 年近くになる。そのため、現在人は三種神器や琴などの漢字表記について、何ら違和感を生じない世代になっている。現にヲシテ文献が漢字混じりの現在語に直訳された場合、古来日本語も抹消の憂き目にあっている。だが、古来日本の呼び名の三種神器は由緒ある「ミクサタカラ」と呼ばれ、また、渡来古琴の七弦琴（しちげんきん）に対し日本古来には複数のコトがあり、５本絃は「ヰ・ス」コトおよび６絃は「ム・ユツ」コトと由緒ある名で呼ばれていた。この二例以外にも他に古来日本の由緒ある言語が存在するなど、現在の呼び名との間には相違が認められるものもある。そして、このヲシテは、漢字渡来以前に我が国に存在した文字であり、ヲシテ特有の古来ヤマト言葉の意味を含有している。だが、現在の漢語に変換すると漢字の意味が強くなり、古代のヤマト言葉の意味があったことも忘れ去られるようである。そのため、　ヲシテ本来の「意味」を探究し、原語を極める研究を原語ヲシテ学と称する。また、ヲシテの難易度により、更に、複原語と難原語に分けることもできる。(2016 年 8 月 30 日、吉田説)

長所（原語ヲシテ学）

漢字に置き換えないためヲシテは変質しない。そのため、神話域として　将来の研究対象が保存される。

短所（原語ヲシテ学）

漢字以前の知識を以てヲシテを再確認しても、神話の延長になる。

（ご参考）神話を脱するには、解読ヲシテ学の手助けが必要。

①ヲシテ複原語

現在語で解釈ができるが、複数の意味が含まれているヲシテをヲシテ複原語と称する。(2016 年 8 月 29 日、吉田説)

②ヲシテ難原語

現在語で解釈が著しく困難なヲシテをヲシテ難原語と称する。(2016 年 8 月 29 日、吉田説)（例）オノコロ、イトリなど

ヰクラムワタ

ヰクラムワタは、ホツマ研究家の間では諸説がある。だが、その元となるホツマツタヱの記述は、二つの事例になる記述があり、一つ目は、１アヤ（綾）６と２１アヤ（綾）２９のヰクラムワタになる。また、もう一つはクラとワタを入れ替えたヰクラムワタ→ヰワタムクラが１７アヤ（綾）７６に記述されている。このように、ホツマツタヱの当時としては、ヰクラムワタか、ヰワタムクラかの原語が未だ確立されてない時代の言葉と判断される。なお、１アヤ（綾）はホツマツタヱのまえがきに当たるが、そこの記述はヰクラムワタのため、ヰクラムワタに優位性が感じられる。

このように、クラとワタなどを五感、器官、臓器などと定まった解読がなされてなかった。そのため、この定まらない原因を探究して見た所、17 アヤ（綾）に記述のクラ、ワタ、四クラ、五クラ、五ワタ、六クラ、キモ（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心葉）、フクシ（肺）、ヨコシ（脾）、ワタソ（副）エテなどが記述されているが、論理的に整理されてないため、誤訳が発生していたことが判明した。

まず、クラとワタの意味を紐解き方法として、アヤ（綾）毎に、クラ、ワタ、キモ（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心葉）、フクシ（肺）、ヨコシ（脾）などを「表」のアヤ（綾）毎のクラ、ワタなどの記述に列記して見た。

表中を見ると、明らかに、１７アヤ（綾）６３、６４と、１７アヤ（綾）７６、７７の二つのグループがあった。そして、その二つのグループは、クラ、ワタとキモ（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心葉）、フクシ（肺）、ヨコシ（脾）などに直接に関係ある記述であることが、表中より判明して来た。

そして、１７アヤ（綾）６３、６４は、クラとキモ（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心葉）、フクシ（肺）、ヨコシ（脾）などに直結していた。また、１７アヤ（綾）７６、７７は、ワタソエテと記述しているところから、１７アヤ（綾）６３、６４のクラのキモ

（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心）、フクシ（肺）、ヨコシ（脾）などに、ワタソ（副）エテと記述されていると解釈される。

このことから、四クラの意味は、キモ（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心葉）、フクシ（肺）、そして、ヨコシ（脾）を含めて、五クラとなっていた。（2016 年 10 月 4 日、吉田説）このことは、現在と同じ五臓を指していることがわかる。なお、ワタソ（副）エテのワタに含まれる名称はホツマツタヱには記述してないが、現在では腹ワタの言葉に繋がっている記述と察せられます。

（注記）
「表」中では、記載欄が限定されるため、キモ（肝）、ムラト（腎）、ココロバ（心葉）、フクシ（肺）、ヨコシ（脾）は、肝、腎、心、肺、脾と表示した。

「表」　アヤ（綾）毎のクラ、ワタなどの記述

アヤ	スス暦	換算西暦	名称	肝	腎	心	肺	脾
	21～22 鈴	-329～-315 年						
1-6			五クラ六ワタオ					
9-20				○				
9-26			五クラに響く					
	25 鈴	-289 年						
14-17			天並クラワタ					
14-25			クラむら（と）					
14-25			葉月ワタ					
	25 鈴	-289 年						
15-5						○		
15-38						○		
16-16			トワタなす					
16-26			これクラワタと					
17-19						○		
17-63			四クラヨコシや	○	○	○	○	○
17-64			ネの六クラ					
17-69						○		
17-71						○		
17-72			五クラに告げて			○		
17-76			五ワタ六クラも					
17-77			ワタソエテ	○	○		○	○
17-78							○	○
17-79					○			
17-87								○
17-89							○	
17-91				○	○		○	

	25～26 鈴	-288～-257 年						
21-7			五クラの五					
21-7			六ワタの七					
21-29			五クラ六ワタオ					
22-4			五クラの神の					
	29 鈴	-256 年						
24-55				○				
24-84			五クラ足し					
	32～50 鈴	-244～-151 年						
38-64					○			
38-83			味噌に五クラ					
38-83			六ワタ祭りは					

ミスマル（御統）

１、 ホツマツタヱ当時のミスマル（御統）

御統の意味を大辞林第三版で解説を拝見しておりました。その解説は、『〔「すまる」は「すばる（統ばる）」の転で、集まって一つとなる意〕、古代の装身具。たくさんの珠たまを糸に貫いて環状とし、首などにかけて飾りとしたもの』 と記載されておりました。

だが、ホツマツタヱ当時（紀元前）のミスマル（御統）は、「五百瓊御統　から巻て」の記述より考察しますと、「五百瓊（たくさんの珠たまを糸に貫いて環状）」であったが、八坂瓊（長い紐）の記述がなく、「から巻て」と記述していることから、「環状の紐の長さは短く、首などにかけて飾りるものでなく、手首などに巻いていた」（吉田説）ことが、今回の調査により推定されるようです。

そして、首などにかけるミスマル（御統）は、後世の「八坂瓊之五百箇御統」の装飾品が該当すると思われ、辞書の御統解説の「たくさんの珠たまを糸に貫いて環状とし、首などにかけて飾りとしたもの」は、この「八坂瓊之五百箇御統」の文章を解説したものと思われるようです。

ミスマルの変遷

ヰモニミスマル　⇒　ヤサカニノ　マカルタマ
（五百瓊御統）　　（八坂瓊の　曲る玉）

⇒　八坂瓊之五百箇御統
（日本書紀の記述）

ウイナメヱ（初嘗会）

初嘗会の類似言葉の現在語に、新嘗祭（しんじょうさい、にいなめさい）や大嘗祭（だいじょうさい、おおなめまつり）があります。新嘗祭、大嘗祭の大辞林辞書の解説を見ますと、次のように記載されておりました。

新嘗祭は、「天皇が新穀を天神地祇(ちぎ)に供え、みずからもそれを食する祭儀。」

大嘗祭は、「天皇の即位後最初の新嘗祭しんじようさい。一代一度の祭事。」

　これに対し、ウイナメヱ（初嘗会）の言葉は、現在の辞書には記載されておりません。だが、ホツマツタヱの４アヤ（綾）３８、３９には、ウイナメヱ（初嘗会）が記述されております。このことから、ウイナメヱ（初嘗会）の語源を考えて見ますと、「生まれたばかりの天日嗣の御子が初めて穀物を供え、食する祭儀（吉田説）」をウイナメヱ（初嘗会）と云うことがわかって来ました。

４アヤ（綾）３８、３９

久方の光　　ア（生）れます
初嘗会　　アユキワスキに
告げ祭り

解説文　　赤文字：ヲシテの現在文を示す。

　久方の光と共にア（生）れますウヒルギ御子。生まれたばかりの天日嗣の御子が初めて穀物を供え、食する祭りの初嘗会の斉場には、赤玉の若日霊の霊が差し込む「キ（東）」の方向にアユキの宮が造られ、「九星のアメノミナカヌシの1神とトホカミエヒタメの8神」を祭られました。また、暮れ日の御玉の落つる「ツ（西）」の方向のワスキ殿には、「ウマシアシガイヒコチ神の11神（キツヲサネの5神とアミヤシナウの6神）が祭られました。そして、天上の元明けの天御祖神に、天日嗣の御子のウヒルギの誕生を告げ祭りが奉納され、初嘗会を経てウヒルギの御子は、天御祖神の信任を受けて、アマキミ（天君）の皇子になられたのでした。

（以上）